

- ◆日時：2021年4月20日（火）～22日（木）
- ◆目的：東日本大震災で地震、津波、原発事故・避難による複合災害後の現状を調査。
- ◆参加者：佐々木義雄、田中晃、中島光明、早川雅子 ＊浪江町職員の渡邊善明氏協力。
（参加者：親類が被災、現地調査、東北応援活動、震災講座などで関心）
- ◆まとめ：＜原子力関係の現状調査＞＜震災津波地域の状況＞＜いわきの語り部＞＜感想＞
- ◆経過：2011年3月11日14時46分 東日本大震災発生 M9.0
 - ・福島第一原発自動停止と大停電、15時37分に津波襲来 11.5m～15.5m
電源喪失と注水・除熱機能失い水素爆発#1, #3, #4、燃料デブリ#1～#3
 - ・直ちに10km圏内の住民避難、12日には20km圏へ拡大 避難者16万5千人
除染が進むも、帰宅者及び避難先での定着者に分散。現在でも3万6千人の避難者
 - ・白血病や甲状腺がんの定期調査中。各種モニタリング結果が広報で報告されている。
発電所ではトリチウムを含んだ汚染水が満杯で、今回国が希釈海洋放出を決めた。

■原子力関係の現状調査（図1）

- (1) **東京電力廃炉資料館**（富岡町）：事故の記憶と記録を残し、反省と教訓を社内外に伝承
 - ・原子力発電所の構造と津波による被災、長期の廃炉事業の説明が主（図10）
 - ・トリチウムの排水については、国際基準&国内基準と課題の説明が聞けなかった。
- (2) **環境省中間貯蔵工事情報センター**（大熊町）：汚染土を発電所周辺の帰宅困難地区に貯蔵
 - ・52市町村の除染土壌を処理し、運搬して中間貯蔵施設に積み上げている。（図2）
- (3) **福島県東日本大震災原子力災害伝承館**（双葉町）：有料600円/人
 - ・原子力・地震・津波・避難の複合災害の経験や教訓、復興の歩みを残す目的で設置
 - ・映像と文字情報の説明や語り部による教訓が時間指定で語られている。
 - ・放射線被ばくや河川の汚染魚のことなど本質理解まで至らなかった。（図3）

◆全員避難した浪江町の現状（広報なみえ2021年4月号や新聞情報、渡邊氏等から）

- ・旗放射線の空中拡散で全員避難（図3）、2017年3月31日避難指示が浪江町東部で解除。現在人口は事故前20,905人、令和3年2月人口16,650人（登録人数で避難者含む） 居住人口1,596人

避難先：福島県14千人、宮城・茨城900人、東京都787人、神奈川415人

- ・夕方の浪江駅からの町役場・旧商店街は車も人も通らない。田畑は草だけで寂しい。
- ・河川魚放射線モニタリング：2つの河川で捕獲禁止中。
アユ等セシウム137が食品の基準値を今でも超えている
- ・イノシシ等の駆除、2年前には市内中心部にも出没した。

◆浪江の新しいまちづくり

- ・**福島水素エネルギー研究フィールド**：太陽光発電でグリーン水素
- ・**道の駅**：低価格品のある庶民性、特産品も多く販わっていた。

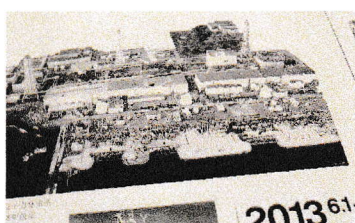


図1 福島第一原子力発電所



図2 除去土壌を中間貯蔵施設へ
出展：中間貯蔵工事情報センター

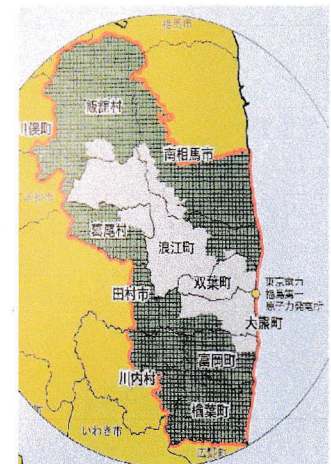


図3 白：帰還困難区域
緑：避難指示が解除区域
出展：特定廃棄物埋立情報館

■地震・津波地域の状況

1. 浪江町海岸部：震度6強、15mを超える津波

- (1) 浪江町海岸付近：海側部住宅は全て流されていた。(図4)
- ・集落の再建は見られない。汚染土処理工場・再開した工場建物では、土地の嵩上げがみられる。
- (2) 旧請戸(うけど)小学校の「遺構」が準備中 (図5)
- ・地震発生直後、津波からの避難指令で81名の生徒と教師13名が大平山に向って40分かけて逃げ、全員無事だった。(図6の遠方の山)
 - ・家族からの迎えは断り、車いすの生徒、靴の脱げた子へは上級生が靴を履かせたり、遊び歩いた山道の道案内をして助け合いながらの避難だった。生徒と教師の信頼関係が一体的な避難になった。
 - ・保護者が死亡した学童は全国に散ったが、15歳になって校舎に入ることができた。黒板に落書きをした。なお、自衛隊や警察も落書きしていた
- *NPO 法人作成の「請戸小学校物語」の情報から記述



図4 浪江町での現場



図5 旧請戸小学校



図6 大平山へ1.5 km

2. いわき付近の被災情報

- (1) 四ツ倉：いわきの最北部の街道のまち、海水浴場
- ・商店街・漁業施設・住居地の大部分が津波で浸水。
 - ・よつくら港交流館が被災、仮営業後、道の駅「よつくら港」として2年後に開所(図7)
 - ・防潮堤の内と外(海岸)を車で行き来できる道がある
- (2) いわき震災伝承みらい館：・昨年建設された。いわき市薄磯地区(図9「歌謡曲・乱れ髪」の塩屋埼灯台横)
- ・いわき各地の被災状況、語り部の会の実体験あり。
 - ・以前訪問時、「チリ地震の津波では被害がなかったので安心していましたが、防潮堤を越えてきた」の証言(図8)



図7 左の建物は情報館



図8 防潮堤と防災緑地

■いわきの語り部の証言集から学べる要旨

- <災害直後>・地震発生後3分10秒、じっと様子を見ていた。物が床に落ちてきた。
- ・被害を想定し、逃げて助かった。自分の命は自分で守ることだ。
- <津波>・防潮堤に見に行ったら危険を感じた ・親に1階に下りないように指示した。
- ・波が黒い壁になって押し寄せた。松の木につかまったり、車がひっかかり助かった。
 - ・逃げない人もいた。荷物を家に取りに行き津波に流された。複数の津波襲来があった。
 - ・年寄は腰を抜かした、連れて高台に駆け上った。年寄を置き去りにして逃げてしまった。
- <生活>・すぐ買いものに行ったら何もなかった。
- ・近くの川からリレー式で水を汲みトイレに使用した。
- <弱い人間>・いわきの避難者を避難所で受け入れなかった。
- ・精神的に不安定になり正常に戻るのに時間がかかった。
- <その他>・消防車水圧、窃盗団、火事、避難所、炊き出し、地割れ、負傷者は担架で病院へ などなど

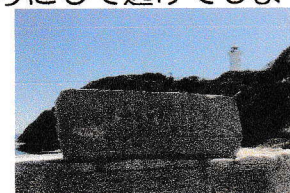


図9 塩屋埼灯台と美空ひばりのみだれ髪歌碑

<感想>

<中島>

- いわき地区にも、新設防潮堤が延々と続く：結果的に景観を破壊し、住民のための住環境復興（安全性も含め）として、正しい選択肢かは、はなはだ疑問が残る。
- 地震・津波被災は時間経過で復興可能であるが、放射能被災は全く別物：
 - ・除染作業が長期に亘り地道に継続されているが、膨大な汚染土壌（黒袋入り）の最終処分問題が棚上げ状態（莫大な費用を費やしているが）。
 - ・国と東京電力の責任問題は拭えないが、この「不幸な国難」を前向きに対処する取組が「表舞台で堂々と議論される環境整備」が急務であると痛感。
（現在は国民感情と加害者の立場から、科学的な論理が通用しない状況にあり、過去の「菅直人政権が設けた無責任な基準」と国際基準との整合性を議論すべき）
 - ・廃炉資料館見学は日本国民として、じっくり時間（3時間）をかけて勉強すべき。
（膨大な熱量を生み出すウランの「燃料棒」1本が、小指程度の細さにびっくり）



図10 東京電力廃炉資料館で

- 10年経過後の放射能被災地：
 - ・浪江町の場合、住民の生活感が同われず「死んだ部落」の印象（2万人の住民の内90%が転出し、移転先で10年間の生活基盤を培っている）
 - ・ふくしま先端技術建設構想
（第2つくば研究都市を目指すもの）
福島水素エネルギー研究フィールド（世界最大規模の水素製造施設：21年3月開所）
福島ロボットテストフィールド
JAEA 大熊分析研究センター
JAEA 廃炉環境国際協働研究センター
JAEA 楡葉遠隔技術開発センター
*はたして地域再生の連携産業に発展できるか？
 - ・地域復興のキーワードは「農業」（渡邊氏も強調）



図11：水素を貯蔵する18mのタンク

- その他：
 - ・浪江町のホテルは、長期滞在の工事関係者でにぎわっていた。
 - ・いわき市役所近のラーメン屋は抜群だった。（図12）
（あごだし使用、こだわりスープ）。



図12

<田中>

- 原子力関係者は一生懸命だが、市民が理解でき、未来が見えるかを自分では探せなかった。「もう10年、まだ10年」の発言も味わいがある。（各伝承館 図10ほか）
継承として語り部が活躍している。聞けなかったのが残念、次回は聞きたい。
- 町内コミュニティ再生支援事業「なみえのいま」で地区毎にまちづくりの状況を伝えている。新聞情報では「ウェブサイトを立ち上げて、つながりを持ち、動き出したい」との若者もいる、非常時にスマホが役立つなど新しい情報化時代に入った。
- 広報なみえに、トラウマ対策は。①SOSを発信する。②悲しみを表出する。③今の良いところを育む。心のよりどころや語れる相手を見つける、との報告が載っていた。